D—3 母親の養育態度と生活満足感に関する一考察

福岡教育大　　野村 泰代

目的　社会経済的条件は、親の養育態度・行動を規定する価値観の基盤を成すものとして重視されている。しかし、客観的には均質な社会経済的条件においても、その生活に対する個々人の満足の度合いは多様であり、特定の社会経済的条件から一定の価値観、さらには一定の態度・行動が生じるものではない。本研究は、生活条件⟶価値観の間に介在する生活満足感をとりあげて、等質な社会・経済的条件の下で生じる養育態度の相違との関連を明らかにしようとしたものである。

方法　「寛大—厳格」の次元に関する養育態度への一般的意見20項目を作成し、3才〜6才の幼児をもつ母親226名に反応させ、系列範ちゅう法によって各項目の尺度を求めた。

この尺度に基づいて、項目分析を通過した意見項目17についての各人の態度得点を算出し、226名中、得点の高い方から25%、56名を寛大群、低い方から25%、56名を厳格群、残りの50%、114名を比較群とし、さらに、これらのグループの成員をA. HollingsheadのSES尺度によって5段階に分類した。ここでは、Class IVに位置した母親106名（寛大群：30名、比較群58名、厳格群：18名）の、生活のはり、収入・住居・暮らし向きなどへの満足感の特徴を養育態度との関連から考察した。

結果　全体としてClass IVに属する母親の生活満足感は低く、寛大群と比較群との間には明確な差はない。一方、厳格群では前述の各々の満足感が他の2群よりも高く、著しい有意差が認められた。また、中流意識・学歴志向も有意に高く、自らの帰属階層を明確に位置づけることによって、高い上昇欲求をもち、厳格な養育態度をとっていると考えられる。